

## デンマーク・スウェーデンの公文書館を訪ねて

水口 政次

昨年の夏（8月18日～9月1日）にデンマーク・スウェーデンに行く機会がありました。たまたま坂本勇さん（東京修復保存センター・五日市アトリエ）が、デンマーク訪問と同時にスウェーデンのウプサラで開催される国際修復家会議（IADA）に参加されるということで、同行させてもらいました。デンマークについては、各種の公文書館や手漉き製紙工場の見学がスケジュールに入っていました。

デンマークでは、コペンハーゲンにある公文書館を3カ所見学しました。3カ所ともにコンサベーターの方に案内をお願いしたので、修復の仕事場、書庫、閲覧室といった順序で見学しました。まず、国立公文書館（RIGSARKIVET）を訪問しました。お城のような建物で、小さな案内板しかなく、よく注意しないと入口が見つかりません。ここで大変印象的だったのは、王さまの文書保存箱（木製・写真）でした。王さまが移動するたびにその箱も一緒に移動するわけです。現在24箱が保存されています。

次に、コペンハーゲン市公文書館（STADSARKIVET）に行きました。訪問したのは、修復の仕事場と書庫でした。公文書館の本館は、観光名所になっている市庁舎の一階にあるそうです。修復場は美しく整理・整頓されており、また、壁や天井の色がいかにも北欧



的な雰囲気に含まれていました。一通り見学を済ませて、一つの部屋に集まって、コーヒーとお菓子や果物をご馳走になりながらおしゃべりしました。坂本さんの通訳で話したり、あるいは私の拙い英語で話したり、結構楽しい会話が続きました。つくづく「同業者」というのは、いいものだと思います。仕事の話が言葉の壁を越えてしまう気がしました。

デンマークで最後の訪問先は、シーランド地方公文書館（LANDSARKIVET）です。ここでは、デンマーク国内にある4つの地方公文書館の一つです。デンマークでは、国内を4つに分けてその地域の地方自治体の文書を収集・整理・保存・利用提供しているのが、この地方公文書館です。この点は、デンマークの特色かどうか詳しいことはわかりませんが、すべて国立機関として機能しています。ここの地方公文書館で感じたことは、書庫にレンガが使われていて所蔵資料とたいへん調和がとれていることです。案内の方が時間を忘れて一所懸命説明されていたのも印象的でした。特に、修復方法等の説明には当然熱が入ります。説明の中に、デンマークでは、大臣通達で永久保存すべきものは、永久保存性のある用紙やインクの使用が義務付けられているという話がありました。今後考えなければならぬことだと思います。

以上で、デンマークでの公文書館めぐりを終わりますが、全般的に感じたのは、どこの館でも専門職としてコンサーベーターやアーキビストが位置付けられているという点です。また、各館の横のつながりがあり、情報交換がひんぱんに行われているようです。

デンマークに一週間滞在して、スウェーデンへ向かいました。デンマークからスウェーデンへは鉄道で行きました。途中船で国境を越えます。入国審査も無ければ税関チェックもないあっけないスウェーデンへの入国でした。ストックホルムから列車に乗り換え、北に向かってほぼ40分のところに訪問地ウプサラがあります。この地にスウェーデンで最古で最大の大学図書館を持つウプサラ大学があります。前に述べましたように、この大学で国際会議が開かれました

が、その話は別の機会にふさわしい人が触れると思いますので、ここでは、私が訪問したウプサラ市公文書館（STADSARKIVET I UPPSALA・写真）について述べたいと思います。



この館への訪問は、あらかじめ予定していませんでした。偶然市内を散歩していた時に、「STADSARKIVET」という文字を見つけました。ARKIVETが文書館ないし公文書館の意味だということはなんとなく感でわかりましたので、翌日訪問する決心をしました。受付で断られてもともとであると考えて、名刺と東京都公文書館のパンフレットを持って行きました。受付の女性に日本から来たアーキビストと告げると、誰かに電話をかけていました。それから、しばらくしてMats Nafsund氏が来まして、館内を見たいかと私に聞きました。もちろん、お願いしますということで、館内を見学することになりました。この時ほど、アーキビストという言葉の重みを感じたことはありません。自分が本当にアーキビストかどうかはたいへん疑問があるところですが、いちいちそんな説明をしたところでここでは意味がありません。外国の公文書館を訪問する際は、堂々とはいかななくても、ハッキリとアーキビストというべきだと思います。館内の印象は、まさに森と湖の国といった感じで、閲覧室、書庫等に木が沢山使われていました。館内の色は白が基調になっていて、いかにも北欧的な印象を持たせます。この館のアーキビストもそれぞれ個室を持っていました。その個室をのぞきましたが、美しい部屋でした。約1時間ばかりの訪問でしたが、親切な対応に感激しました。

以上、デンマーク、スウェーデンの公文書館

への訪問記めいたものを述べてきました。経験された方は同様な感想を持つと思いますが、他の文書館や公文書館の見学は楽しいものです。国内と同様に外国でもそうです。設備や保存用具等は見ればわかりますから、言葉はあまり必要がありません。ある程度の文書館用語を覚えていけば、結構向うの担当者と話ができるものだと思えます。もちろん、先方に見学を依頼する場合は、あらかじめその旨を伝えることは必要です。後は、限られた言葉と「アーキビスト」としての心意気のみです。こ

れから外国に行くチャンスがありましたら、その国の文書館や公文書館に立ち寄って頂きたいと思えます。

(追記) この原稿を書いている際に、次のような本を入手しました。それは、「図書館員のための英会話ハンドブック 海外旅行編」(1991.10.22 日本図書館協会発行)です。図書館員が外国の図書館を訪問する際の方法、質問や用語等の英語表現がわかりやすく書かれています。我々にとっても参考になると思ひまして、紹介しました。  
(東京都公文書館)